



子どもたちが、世界各地の民族の暮らしや文化を演じて体験する会が続いている。文化人類学者や俳優がサポートし、地球上には自分たちとは異なる世界がいくつもあることを理解してもらうのが目的だ。キツ実践を始めて今年で10年目。

飯塚 宜子氏

831



いづか・のりこ 1962年生まれ。環境教育学、地域研究。演劇やワークショップを通し、子供たちに学びの場を提供。詳細は「マナラボ 環境と平和の学びデザイン」サイトで紹介。

演劇通し子らに異文化体験

カケのひとつは、北米先住民の考え方を知ったことにある。彼らは「環境と人間が一体」であり、「すべてはひとつ」と信じているという。グローバル経済が世界の隅々まで浸透する現代に、本当にそんな人々がいるのだろうか？ 私は、アラスカからカナダのブリティッシュ・コロンビア地域の先住民、クリンギット(トリンギット)の村を訪ねてみた。湖や森は息をのむほど美しい。

一方、人々は近代的な家に住み、四輪駆動車を運転し、テレビもパソコンも使う。21世紀そのものの暮らしがそこにあった。13歳の男の子にカメラを渡して「大事なモノを撮って」と頼むと、何枚か撮影した。山や湖が写っている。「これは何？」「ランド(Land)だよ」。

私は何度か彼らが次世代に狩猟採集や神話、歌を伝えるキャンプやカナートの旅に参加した。「Land」は土地と訳されるが、彼らのLandは、水や動物や人間や土壌や不可視のものまで、彼らの領域に存在する一切を含む。一切のそれぞれが生命を持つような概念なのだ。

彼らはワタリガラスとオオカミを先祖とするグループに分かれ、自らも動物たちと同じものと言う。動物は人間の兄弟だ。Landは人間の所有物でなく、みんなのものだ。猛暑や水害など環境問題が深刻さを増す現代社会で、クリンギットの考え方が正解と言っているのではない。解決を目指す方法はひとつではなく、

世界には多様な豊かな思考が共存することを次世代を担う子どもたちと学び合いたい。異文化を知ることが世界観のアップデートでもある。

「読む・聞く」を中心とした教育だけでは、理解できないこともあるだろう。人類学者は現地に赴き、人々と対話し、モノゴトを体験する。さまざまな世界観を、自分の身体を通して再現するように理解する。柔軟な子どもたちも、モノゴトの体験から異なる文化を解釈できるだろう。

演劇的な体験の場は、子どもたちにとって、現時点で考えられる最も効果的な実践だ。「ロールプレイ」で子どもたちが役になりきる時、異文化はシブングトになり、子どもたちからは想定を超えた様々な発想が生まれている。

コロナ禍で休止した活動は今秋、復活の予定だ。カナダやインドネシアを想定した体験の場での子どもたちの新たな発想が楽しみである。(京都大東南アジア地域研究研究所 研究員)